

第61回 日本糖尿病学会年次学術集会 学会報告



今年も第61回日本糖尿病学会年次学術集会が東京でありました。ここ数年の地方都市開催とは違い会場もほぼ1カ所で、15000人の参加者を収容できました。巨大な地下フロアに大展示場とポスター会場を配し、迷ったらここに来る風に皆さん使っていたようです。今年は昨年、一昨年のようなセンセーショナルな大規模臨床データの発表はなく、インスリン治療、経口薬治療それぞれ地道に知見が集積しつつある感じでした。その中で、治療に関してはGLP-1受容体作動薬の発表が急増、私もそのセッションの座長をしていましたが、製品間差・効果・副作用適応患者等々のディスカッションが時間が終了してもフロアで行われていました。糖尿病の病態の理解という意味ではグルカゴンの新測定法が確立しつつあり、インスリンと連絡するグルカゴンの意義がシンポジウムで解説されていました、糖尿病の遺伝子異常が少しづつ明らかになり、膵臓やインスリン分泌細胞の再生治療への道筋もおぼろげながら見えてきた感じでした。

当院からも日常業務の多忙の合間を縫って5演題発表することができました。各人貴重な経験になったようです。来年は5月に仙台であります。当院にとってもこの貴重な発表の場を大切にしていきたいとおもいます。種田

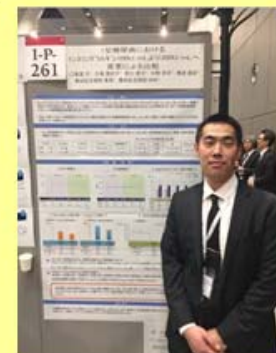
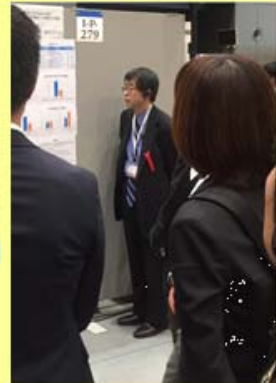
演題名「1型糖尿病におけるインスリングルルギン100U/mLより300U/mLへ変更による比較」

発表日：24日（木）ポスターセッション

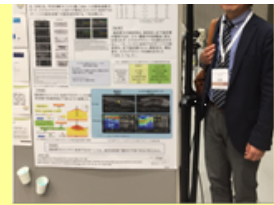
感想：今回の学会会場が東京のためか、いつも以上に多くの方が発表を聞きに来ており、結果や評価などについての情報交換ができ良かったと思います。葛葉

演題名「脂肪肥大とインスリン由来アミロイドーシスの超音波による鑑別についての検討」発表日：25日（金）ポスターセッション

感想：発表順はラストでしたが多数の聴衆者でした。発表後、永瀬見正先生や皮下硬結のエコー検査を行っているという大阪労災の先生とディスカッションができましたので、今回の発表はとて有意義でした。



この研究を始めた当初は、発表しても全く注目されず空しさを感じておりましたが、最近、やっと皮下硬結の発見が理学的診察では難しく、画像検査の重要性が認識されて来たように思います。参加させていただきありがとうございました。菊池



演題名：CGMからみたDapagliflozinによる早期血糖改善効果の検討

発表日：26日（土）口演

感想：昨今では「血糖値」を調べる手段の多様化がめざましいものとなってきている。得られ情報の中でも、「血糖変動」、「グルコーススパイク」などのワードをTVなどで聞くようになってきている。しかしこのワードの意味が十分伝わらずに一人歩きしている印象もある。ただし糖尿病科医としても使用する薬効の効果説明には必要な概念になってきている。本学会においても様々な血糖測定器を用いた血糖変動に関する報告が散見された。今後も治療方針選定のためにも非常に有用な検査方法であり、ニーズの高い概念であることを感じさせられる会であった。飯島



演題名：当院入院患者におけるDehydroepiandrosterone-sulfate(DHEAS)と網膜症、慢性腎臓病との関係（2015-2016年分について）

発表日：26日（土）口演

感想：糖尿病合併症とDHEASとの関連について発表した。現時点でできることは行い、又、次回へ向けての課題も明らかではあったが、改めて、次回へ向けての課題についても再認識できた。

尚、今回は、大阪で他学会（日本抗加齢医学会）がほぼ同時期にあった為、翌日東京大阪間が日帰りでの移動となり、非常に多忙であった。板東



演題名：1型糖尿病と2型糖尿病の夜間低血糖リスクと9点血糖値プロファイルに基づく日内血糖変動は相関する

発表日：25日（金）口演

感想：夜間低血糖は無症状のことが多く、インスリン治療においては重症化が懸念される。多くの場合夜間に血糖測定ができないため、日中の血糖値ほかの資料で夜間の低血糖を推測しなければならない。今回海外の臨床研究である、Switch 1およびSwitch2試験を用いて、9点血糖値プロファイルに基づく血糖日内変動と夜間低血糖の頻度が相関することを示した。日内変動の少ないインスリン製剤を選択することが重要で、この点について質問があった。榎田

